

when the subject is the person or thing spoken of, the *third person*. (*Winston Simplified Dictionary*)

とするのにもその間の事情を物語るものが感じられるのである。主語の I, you, he, etc. が person として当面の問題となるのであつて、my, me, your, you (accusative), his, him, etc. はその副次的な de-clension に外ならない。

以上のような見地から person を眺めて personal pronoun を再検討すれば、I, II, III に共通して person と称し得る所以は所属の代名詞のすべてが sentence の中に用いられて主語の働きをつとめることが出来るという事が、dramatis personae がそれぞれの役を勤めるのと同じように、主語となつた person が何かの動作をするという意味を持つている事と併せ考えられる事を見落してはならない。同じ代名詞でも it が personal であつて this, that が demonstrative であるという区別は前者には "person" 的な語感が濃厚だということが出来ることに起因していると思われる。This is, that is, it is と並べても大して相違点も感じられないが、This has, that has, it has と並べると it has の方が前二者よりも familiar に感じるのは has という「動作」の動詞と it という personal pronoun との結びつきが this, that よりも自然に受け取れるからであろうと思う。

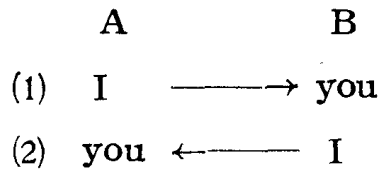
(昭和27年8月20日稿)

8.

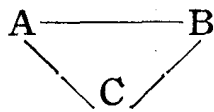
Impersonal verb は rain のような動詞を言い、it rains の it を impersonal "it" と呼び、このような構文を impersonal construction と称する。"It repents me." の如き impersonal construction は archaism になつて、今では "I repent." のような personal construction に變つて來たと説明される。このような場合の personal, impersonal を「人称」、「非人称」と訳して「非人称構文」から「人称構文」になるのが一般的な傾向だと言うとき、一人称、二人称、三人称の「人称」とは異なつた意味を感じ取りはしないだろうか。I repent. には personal subject があると言うのは It rains. の it のような漠然とした主語でなしに「誰が」repent するのかにはつきり答えられる主語があることを意味しているようである。とすると所謂「人称」の別を示す person という用語から派生した personal pronoun の personal と食違ひを生じることとなつて同じ文法用語が別様に用いられるという不都合を來すわけである。これは Jespersen も指摘したのであるが、事實英文法に於てこれらの用語が上のように使われている以上かかる不都合を認める必要のないだけの共通の語感が存在するものと見なければならぬであろう。person の普通の意味「人・者」と文法上の「人称」と區別した事がいけなかつたのではないかと思う。first, second, third person を「第一、二、三人称」としないで「第一、二、三人（又は者）」等として英語の名称と一致させて置けばよかつたのである。first person は speaker の「話す人、話し手」であり、second person は「相手」とあるという風に考えれば person は「手」に相当するものである。「手」は「主」と相距る一步であつて impersonal は「無人、無主」なのである。person の定義を

a certain relation existing between a verb and its subject, called, when the subject is the speaker, the *first person*; when the subject is the person spoken to, the *second person*; or,

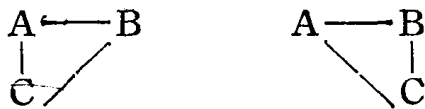
置にあるものである。



三人称のCはA、Bの構成する話の場の圏外に位置してA、Bから等距離にあると考えられる。



A が speaker ならばBを you と言い、CをCと言い、更に he と言うのであるが、Bが speaker ならばAが you となるが、Cは依然としてCと言い、he と言つてA、Bからの位置に変わりが無い。ところがAがCを指して this と言えばBから見ればthat となり、AがCを that と言えばBから見れば this となる。そうするとCの位置は次のように



A、Bからの距離が違つて来る。しかるにAがCを it と言えばBから見てもやはり it であつてA、Bから等距離になるのである。this, that は demonstrative pronoun であるが、it も he, she, they と共に元は demonstrative であつたのが現在 personal pronoun に編入されている理由をこの辺に見出すことが出来るように思われる。即ち話の場から見てのその圏外の三人称の名詞を一人称から見ても二人称から見ても同じ名称で呼び得る代名詞という条件にかなつたものが he, she, it, they であつて、これらは殆ど純粹無色に第三者の「もの」そのものの代名詞の役を果たしていて、this, that, which, some 等に認められる colouring (色づけ) が感じられない点が大きな特徴であろうと思われる。他の代名詞を除外して特にこれらを personal pronoun の三人称に指定する所以であろう。

cedent に代るべきものがあつて、これあるが故に he とは別箇のものと考えられるのである。

6.

前節の問題を解決するためには代名詞とは何か、名詞と代名詞とはどう違うかという根本問題にも触れなければならないのであるが、ここではただ結論だけを述べるに止めよう。名詞は一般的、抽象的、共通的なものであり、代名詞は特殊的、具体的、全体的なものであると言うことが出来る。代名詞のあるところにはそれを特殊、具体化する「現場」が無くてはならない。this や that を用いれば、現場での demonstration (指示) が伴うことが先ず考えられるし、he, she, it, they を用いれば現場での reference を前提とするものである。dog という名詞を具体化するために this dog と言ひ、this と言ひ、更に it と言ふのであるが、現場に於ては this, it は何のことを言つているのか明白なのである。一人称と二人称の代名詞に必要な現場は「direct speech の場」なのである (複数の we と you には reference の場も考えられる)。この現場では speech の当事者はお互いに自分を I で、相手を you でしか表現することが出来ないものであつて、もしもその代りに名詞を用いたら忽ちにして話の場の圏外にはみ出してしまうことになるのである。所詮話の場は原則的には tête-à-tête の sphere であつて I と you の二人で事足りるのであり、その I, you が何者であるかを point したり refer したりする必要がないのである。person と言へば第一義的には first person と second person の二つを言うて見ていいのである。third person とは一人称と二人称で形成する話の場の外に置かれるあらゆる「もの」が話の場で話題となるときの名称であつて、すべての名詞がこれに属することになるのである。

7.

話の場の当事者 A と B とは交互に I と you と言ひ合つて対称的な位

別箇に取扱うところが見られる。「指す」ということは demonstrative pronoun について普通言われることであるから personal pronoun にはこれを避けることにしても、三人称の代名詞は多分に demonstrative 的なものを保有しているものと見て、それに "refer to" すべき antecedent を認めることは容易に首肯されるのであるが、それでは一人称と二人称には何故そのようなものが認められないのであろうか。これは一人称には I, we、二人称には you という代名詞だけで名詞が加わらないのは何故かという疑問にも通じる。

I, your master, command you.

の master は I と apposition だから一人称であるとは言えない。
それは

I command you.

と同じように

Your master command you.

とは言えないからである。(master は三人称だから commands としなければならない。)

Charles, come here.

の Charles は vocative だから二人称であると言うのもよろしくない。それは

You come here.

と同じように

Charles come here.

とは言えないからである。apposition や vocative は直接に sentence の要素にはならないものである。上例で your master はある意味では I の antecedent であり、Charles は you の antecedent であると言えるであろうが、三人称に於ける如く antecedent の反復を避けるために I, you を使うのではない。John comes here. の代りに He comes here. となる如く I comes here. と You comes here. とすることは出来ないのである。I, you には he に必要とする ante-

5.

Treble & Vallins: *Dictionary of English Syntax and Idiom* を見ると personal pronoun には I, we (first person) と you (second person) だけを挙げて、he, she, it, they は demonstrative pronoun に編入して (This pronoun is generally called the third person pronoun.) と註している。発生的な問題はともかくとして、一、二人称と三人称との間には自ら差異の存在することがこれによつても窺われる。Oliphant: *A Short Course in English Grammar* (1950) の personal pronouns の説明 (p. 39) には

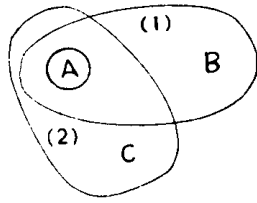
These pronouns are used to refer either to the person speaking, the person spoken to, or the person or thing spoken of. とあつて、各人称とも "refer to" する特性のあることを提示しているが、Curme: *Principles and Practice of English Grammar* (1950) の personal pronouns の説明 (§9. A) には

The speaker employs *I* or *me* instead of his own name... *You* is used in direct address instead of the name of the person spoken to.

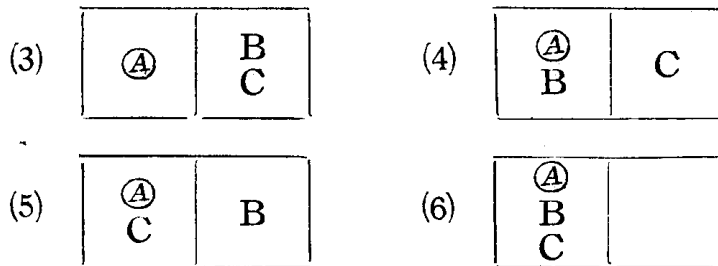
と言ひ、更に

He, she, it, they, them are used instead of nouns that have been previously mentioned... These pronouns always have an antecedent, i.e. a noun, pronoun, clause, or sentence to which they refer.

と述べて、三人称には "refer to" すべき antecedent の存在を認めて、一、二人称にはそれを明示していないのである。「英語学辞典」にも一人称の「I は話者が自分自身を指して用いる。」又二人称の「you (単) は話者が相手を指して用いる。」と「指して」と言つてゐるのに「三人称の代名詞は一般に refer すべき先行詞 (antecedent) をもち、その反復をさけるために使う」と述べて、三人称を一、二人称とは



のように話の場が二つ考えられるが、(1)ではBが話の相手 (addressee) であり、(2)ではCが話の相手であるが、何れの場合もB、C二人が聞き手 (hearer) である。聞き手は二人称に限らないのである。更に

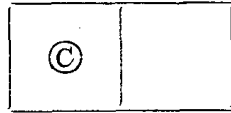


も考えられる。(3)の二人称は複数、(4)(5)(6)の一人称も複数である。

C and I are the same age. We go to the same school.

では $C+I=we$ だから *C and I* は一人称である (同様にして *you and he* は二人称である) と説明するのは当を得ていない点がある。*C and I* と発言した瞬間は三人称の *C* と一人称の *I* であつてそれ以外のものとは考えられない。*C and I are* は *we are* と同じだからと言うのではなくて [$C+I$ =複数の主語] だから複数の動詞 *are* と agree しているのであると見るべきである。一人称の *we* は *I* とは異なる特質があるが、それは $I=the\ speaker$ であるのに $we=the\ speaker+...$ であることである。 $we=I+you (+he+...)$ などと説明する代りに $we<I+you...$ とすべきである ($I+you...$ が *we* 「である」のではなくて *we* 「になる」のである)。話の場は時々刻々に変化するものであるから、*I* と言えば *I* の、*we* と言えば *we* の話の場が生じるわけで、*I* と *we* とが共通の話の場を占めることが出来ないからである。従つて *I* と *we* に共通するものは *I* ではなくて *speaker* なのであつて、*boy* と *boys* に共通するものが *boy* であるのとは事情を異にするものである。

外の間接表現となる。しかし A says は C の発言であつて、C 自身の立場からすればこれ又一个の直接表現



である。つまり I は話の場に於ける 発言者 自身の表現である。そこで person とは direct speech に於ける speech の当事者を speaker の主観的な立場から speaker を第一番、話しかけられる人を第二番とする順位なのであつて、三人称は所謂第三者であつて speech の局外者である。このように話の場の成立には先ず第一に speaker の発言が根本条件であり、その発言は常に speaker の主観的な立場からなされることを考えれば、前節の

A speaks to B about C.

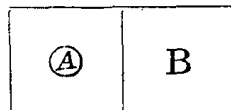
は A の直接表現にして

A : I speak to you about C.

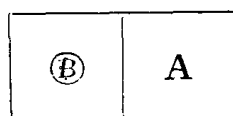
としてはじめて person の実態が把握されることになり、こうすることによつて従来の定義が生きて来るのである。

4.

話の場は speaker の発言の度毎に新しい場が発生して古いのが消えて行くものである。A, B の A が発言すれば



となり、B が発言すれば



となる。話の進行につれて話の場は千変万化する。今仮りに一室に A, B, C の三人が居て、A のみが発言するとすると

ことになる。次にBが

"How are you, A ? "

と言つたのに対して、A が

"I am quite well."

と答えたとしたら、I = A だから

"A am quite well."

となるかと言うと、そうならないで、

"A is quite well."

となつて

Ⓒ	B	A
---	---	---

としなければならない。即ち話の場は

Ⓘ	you
---	-----

で表わされ、これによつて sentence が構成されるのである。これが person ということなのであつて

Ⓘ	I	II
---	---	----

とすることが出来よう。

AがBに向かつて

A : I hate you.

と言うのは、言わば話の舞台に於ける役者Aの主観的なセリフなのであるが、これは見物席のCの客観的な説明を以てすれば

C : A hates B.

となるであろう。これを

A says, "I hate you."

A says that he hates B.

と書けば I hate you は話の場の直接表現、he hates B は話の場以

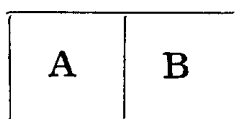
3.

ここに A と B の二人が居て、

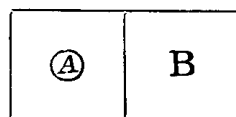
"Good morning, A."

"Good morning, B."

と挨拶を交わしたとする。「呼びかけ」ることによつて「話の場」が出来上つて、A と B とは話の場の *dramatis personae* となつたのである。これを



で表わすことにする。A と B とはお互いに話しかけたり話しかけられたりするのであるが、



として④は話しかける人、B は話しかけられる人を表わすことにしよう。A が B に

"How are you, B?" (1)

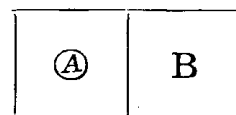
と言つたとすると、you=B だから you に B を代入すると

"How are B?"

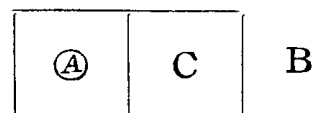
となるかと言うと、そうはならないで、

"How is B?" (2)

としなければならない。(1) は

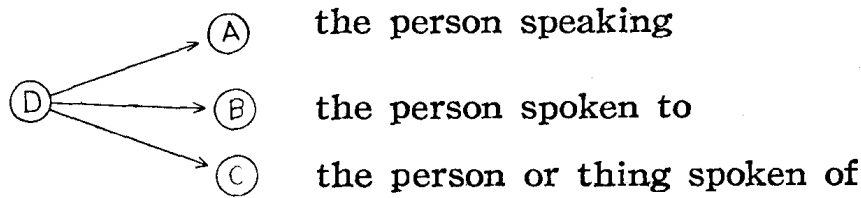


であるが、(2) は

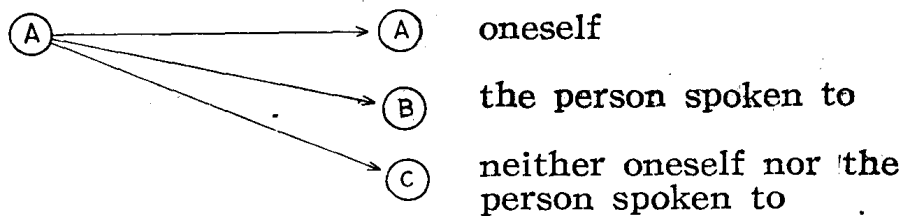


となつて A はもう一人の人物 C に話しかけて B は話の場の外に出される

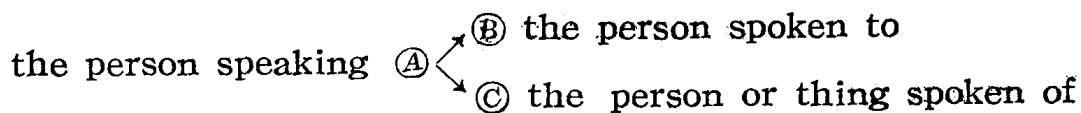
はこの用語は不適當だと言わなければならない。おそらく Jespersen は *N.E.D.* の定義を次のように解したのであろう。



即ちある人が客観的に一人称、二人称、三人称を眺めたものとしてその不備を衝こうとしたものと思われる。Jespersen の定義を図解すれば
[one speaks of]



となるであろう。即ち一人称の A が客観的に自己及び二、三人称を眺めて話しているのである。"speak of" を生かしてすべての人称に共通に用いようとしたものであるが、これによれば "the present author" の如きが一人称になることになる。私は *N.E.D.* の定義を次のように解する。



即ち一人称から見ての二人称、三人称と考えるのであつて、"spoken to, spoken of" の裏には speaker が "speak to" して speaker が "speak of" することが imply されていると見るのである。A, B, C の三人が居て

A speaks to B about C.

ならば A が speaker で、B は spoken to、C は spoken of に当るのである。だがこの文で A が一人称、B が二人称、C が三人称だとは言えないところを見ると、この定義もまだ不十分だと言わなければならない。

The First Person (一人称)=話をする当人 [I, we]

The Second Person (二人称)=話の相手 [you]

The Third Person (三人称)=話題のもの [he, she, it, they] [凡ての Noun]

と異なるところがある。即ち三人称を後者では「話題のもの」と言うのに対して前者では「話者と相手以外のもの」としている点である。

Sonnenschein: *A New English Grammar* の "the speaker, the person spoken to, and the person or thing spoken of" (Part I, § 73) の如き定義が日本で踏襲されて学校文法に広く行われたものであろうが、それが「英語学辞典」の定義のように改められたのにはおそらく Jespersen: *The Philosophy of Grammar* の次の passage が大きく影響したものであろう。

In the NED "person" as used in grammar is defined as follows: "Each of the three classes of personal pronouns, and corresponding distinctions in verbs, denoting or indicating respectively the person speaking (*first person*), the person spoken to (*second person*), and the person or thing spoken of (*third person*)." But though the same definition is found in other good dictionaries and in most grammars, it is evidently wrong, for when I say "I am ill" or "you must go" it is undoubtedly "I" and "you" that are spoken of; the real contrast thus is between (1) the speaker, (2) spoken to, and (3) neither speaker nor spoken to. In the first person one speaks of oneself, in the second of the person to whom the speech is addressed, and in the third of neither. (p. 212) だが果たして Jespersen の定義が正しくて N.E.D. の定義が誤なのであろうか。Jespersen は "spoken of" されるのは三人称だけでなく一人称も二人称もそうだと言うが、spoken of をこのように解するならば speech の中のすべての word は spoken of されるのであるから person の区別に

Person 論

空 西 哲 郎

1.

Sentence に於て person ということが問題となるのは主として I am, you are, he is のような主語と動詞の關係に就いてである (future tense に於ける will, shall の用法にも person が關係する) が、person と言えば I, we が first person、you が second person、he, she, it, they が third person であると言う時の person をさすのだと漠然と言ひ、「人称」の訳語をあてる。I, we, you 等は personal pronoun (人称代名詞) であつて日本文法の「人代名詞」のように「人 (person)」を示す代名詞でなくて「人称 (person)」の區別を有する代名詞という意味だから it も personal pronoun であると説かれる。それでは person の別のあるものは personal pronoun だけかと言うとそうではなくて他の代名詞や名詞は third person であると言う。又 personal に対して impersonal という用語があつて、例えば impersonal verb (非人称動詞) は impersonal construction に用いられて personal construction に対照させる。その impersonal construction と言うのは現代英語では It rains. のようなもの言うので third person であるのに impersonal (非人称) であると言う。Person という用語はよく考えて見るとはつきりしない点がある。

2.

研究社「英語学辞典」によれば「person (人称) は「話者 (一人称)・相手 (二人称)・それ以外のもの (三人称) の區別を示す文法範疇をいう。名詞・代名詞・動詞に認められる。」と定義される。これは従来の学校文法の定義、例えば Hosoe's New Concise English Grammar (p. 17) の